



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	朝鮮人「満州」移民のライフヒストリー（生活史）に関する研究：移民体験者たちへのインタビューを手掛かりに【論文内容及び審査の要旨】
Author(s)	朴，仁哲
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(教育学)
Dissertation Number	甲第12056号
Issue Date	2015-12-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/60479
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	PIA0_RENZHE_review.pdf, 審査の要旨



学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称 博士（教育学） 氏名 朴 仁哲

審査担当者	主査	特任教授	竹本 幸博
	副査	准教授	土田 映子
	副査	特任教授	野澤 俊敬（国際本部）
	副査	准教授	小田 博志（文学研究科）

学位論文名

朝鮮人「満州」移民のライフヒストリー（生活史）に関する研究
——移民体験者たちへのインタビューを手掛かりに——

本論文は 2006・2013 年にかけて朝鮮人満州移住体験者に近年の社会学的アプローチであるライフヒストリー法を用いて中国で 16 回、韓国で 3 回聞き取り調査を行い、94 名の体験記録を分析、分類し再構成を行ったものである。ライフヒストリー法は、ただ話を採録するのではなく、個々の記憶や、人生の断片を、近代や現代の社会史、歴史の文脈に据えて再構成するアプローチである。満州移民体験生存者の数も少なくなり、かつ彼らの大部分が字の読み書きが不自由で、自伝のような記録を残しておらず、また残すこともないという現実にも照らして、彼らの体験は聞き取りなど第 3 者の手によってしか記録として残せない。それもその結果は、戦後 70 年を経て、わずかな生存者の断片的な記憶の寄せ集めにならざるを得ない。本論文はその断片の一つ一つを当時の歴史的、社会的背景を探りつつ、対応する社会的、歴史的な文脈の中に据えて、失われつつある朝鮮人満州移民の姿を蘇らせたものである。

論文第一章では人間の記憶の採取法としてのライフヒストリー法が従来の歴史・社会史研究と比較して、朝鮮人満州移民研究・調査においては適切、有効であることを論じ、第二章では、ライフヒストリー法により集めた証言に基づき、当時の朝鮮人が満州に移住するに至った様々な事情を、少ないながら先行研究で挙げられている要因を踏まえながら検証した。移住の背景に関しては統計データがあるものの、政治・経済的要因として従来から指摘されているのは朝鮮総督府が朝鮮半島内の過剰人口対策として、また頻発した小作争議などの半島内問題緩和のため満州への移住を推進したことである。本論では、採録し分類した 8 つの事例群により、これらのデータの裏付けだけにとどまらず、農業移民などの項目に含まれる統計データからは十分にうかがえなかったケースを移住背景として提示した。この当時の朝鮮半島内に流布していた情報により移住するに至った数例のケースの

存在はこれまでの文献資料では明確な姿を捉えられなかった当時の朝鮮人社会の複雑かつ混乱した状況を示すもので学術的に意義深い。

第三章では満州統治の方針であった五族協和下での日本人、中国人、朝鮮人の日常生活を証言から再現し、日本、朝鮮、中国の順で厳然として存在した民族による処遇の差を、学校教育、乗り物、給与待遇などをきっかけとして呼び起こし、統治の理念と現実の差を浮かび上がらせている。

第四章では、朝鮮人満州移民者の戦争体験を取り上げ、戦争前から戦争中、戦後のシベリア抑留体験までの当時の戦時色、徴兵の記憶、終戦間近の避難経験や混乱の様子を個々の証言から再構成している。

第五章では証言者の記憶を呼び起こす意図をもって対話形式のインタビューを行い、それらの事例を繋げて当時の記憶を再構成しているが、そこにつづられているのは在満朝鮮人の中国人差別の現実や、朝鮮人同士の反目などの遠い記憶の底から引き出された暗い複雑な思い出であった。

本論文の学術的評価については、先行する少ない満州朝鮮人移民関連の研究を個々の体験者の証言により丹念に裏付けたミクロレベルでの検証にあることと、例えば、朝鮮人の満州移住を決意させた内因、外因の分析に見られるミクロレベルの発見にも十分な学術的価値が見出さう。

朝鮮人満州移民の歴史の記憶研究面では、本論により、もともと住んでいた中国人との相克、加害者、同時に被害者としての体験、移民に至った各自の事情、当時の日本の植民地政策の民衆レベルでの現実、また、朝鮮人日本兵として終戦直後の混乱、シベリア抑留体験、戦争末期、直後の日本人移民らの様子、その一方、満州での日常の姿、学校教育、交流、日本人への反発などが個々の証言の中から浮かび上がってくる。本論はこれらを記録することと同時に証言者たちが彼らの体験にいかなる意味付けをしているかを引き出し、それが被害者、加害者の視点を超えた複眼的思考に基づく点にも着目し、ともすれば単純な被害者、加害者の二項対立的な満州体験集積に陥ることなく、次の世代に伝える意味を汲みださう満州体験者の記憶の貴重なアーカイブ構築に寄与した。加えて、これらの記録は戦後 70 年を経た現在でも中国の国内特殊事情から得難い証言であることを考慮すれば、これらの発掘、採録それ自体にも学術的評価が与えられるべきと判断される。

以上のように、本論文は朝鮮人満州移民研究および教育学研究に十分に貢献しており、よって著者は北海道大学博士（教育学）の学位を授与されるにふさわしいと認める。